

第10回定例岡山県教育委員会議事録

- 1 日 時 令和5年9月1日(金)
開会14時30分 閉会15時29分
- 2 場 所 教育委員室
- 3 出席者
- | | |
|--------------|------------|
| 教育長 | 鍵本 芳明 |
| 委員(教育長職務代理者) | 田野 美佐 |
| 委員(教育長職務代理者) | 梶谷 俊介 |
| 委員 | 松田 欣也 |
| 委員 | 上地 玲子 |
| 委員 | 服部 俊也 |
| 教育次長 | 國重 良樹 |
| 教育次長 | 田中 秀和 |
| 学校教育推進監 | 中村 正芳 |
| 教育政策課 | 課長 小林 伸明 |
| | 副課長 中江 岳 |
| | 総括主幹 石崎 貴史 |
| 高校魅力化推進室 | 室長 室 貴由輝 |
| 文化財課 | 課長 浜原 浩司 |
- 4 傍聴の状況 1名
- 5 協議事項
- (1) 岡山県教育関係功労者表彰について
 - (2) 令和6年度県立高等学校第1学年生徒募集定員の策定方針について
 - (3) 令和5年度岡山県指定重要文化財の指定等の諮問について
- 6 その他

7 議事の概要

開会

非公開案件の採決

(教育長)

本件議題に入る前に、議題の公開の可否について決定したい。協議事項（１）は表彰案件であるため、協議事項（３）は教育行政の公正を確保する必要があるため、教育委員会会議規則第１２条に基づき、非公開とするよう発議する。

委員から議題を非公開とする発議はないか。

(委員全員)

(特になし)

(教育長)

この発議は、討論を行わずにその可否を決定することとなっているので、直ちに採決に入る。協議事項（１）（３）は非公開とすることに賛成の委員は挙手願う。

(委員全員)

挙手

(教育長)

全会一致により本案件は非公開とすることに決した。

協議事項（２）令和６年度県立高等学校第１学年生徒募集定員の策定方針について

○高校魅力化推進室長から資料により一括説明

(委員)

将来的に子どもの数が減少することについては致し方ないかと思うが、募集定員策定上の留意点のウのところ公立と私立の割合が、70：30という説明がされたが、私立の方が定員を超えて、生徒を受け入れている学校もあると思うが、そういったところの見込みも含めて、30%ということなのか。

(高校魅力化推進室長)

見込みというよりは実際の数字もそのように今も推移をしている。

実際のところ私立については、県立のように数年にわたって中学校卒業見込者数が減っていくことを見越して私立全体での定員の削減というのは行っていないが、最終的な受け入れ実績としては、大体70：30になっているところではある。

(委員)

実際どのくらい私立に入学しているかは別にして、全体の募集定員の数の数字に合わせているということか。

(高校魅力化推進室長)

実際がそうになっている。

また、私学協会との公私連絡会等があるので、そこで定員について県立については策定方針に基づいて、生徒数を考慮し減らしていると伝えている。私立の方には「今後、定員の削減も必要だと思うがどのようにお考えですか」と聞いたが、「1校1校がそれぞれ1企業なので、コントロールが難しい」というような回答をもらっている。

(教育長)

70 : 30の数字は、前回の高教研の中で記載があり、私立と合意が取れている。

(委員)

しかし、私立が定員を減らさなかった場合、県立のみが減らすと70 : 30の割合が変わるのではないかと。

(学校教育推進監)

私立の定員は県内の中学生だけを対象とした数字ではない。一応70 : 30で定員を分けているが、私学の30がそのまま私学の定員になっておらず、私立は県外からの中学生も含んだ定員を出している。あくまで公立と私立での県内の中学生の受入率として捉えていただきたい。

公立の場合は、ほとんど県内の中学生になる。

(委員)

公立の県外募集も定員に含めるのか。

(学校教育推進監)

定員ということ言えば含めていない。

(教育長)

私立の場合は、学校によって状況がかなり異なるので、トータルすると現在、70 : 30になっているという状況である。

(委員)

40人を下回る学級編制についてももう少し聞きたい。全県的な視野というものがどういうものかということと、実際にどれぐらい下回っているのか。

(高校魅力化推進室長)

県北になると、生徒数も学校数も少ない中で、多様な生徒のそれぞれの希望に応えようとして、例えば普通科が1クラスと、あとは商業、工業、農業等いろんな学科を設置し、1クラスを40人とした場合、定員を充足しきれないので、1学級の人数を40人より減らして学校規模を小さくしながらでも複数の学科を置くことができるようにというのが全県的視野にというものである。令和5年度第1学年の募集定員では、高梁城南高校のデザイン科で定員が35人、新見高校の普通科35人、生物生産科30人、工業技術科35人であり、40人未満の定員は2校、4学科ということである。

(教育長)

40の倍数にしていくと、どうしても設置できない学科が定員を少し下げることによっていろんな学科を設けるようにしてという考え方である。

(委員)

このことによって教育的効果とか何か課題や問題が発生しているのか。

(高校魅力化推進室長)

学科を維持するということでは効果があると思うが、学校の定員に対しての教員数や、学びを維持していくための教育内容など課題が出てくる。

(教育長)

高等学校の場合は、学級数ではなく、収容定員に対して教員の数が決まるため、1学級における生徒数を減らすとなると教員1人当たりの負担が増える。

(委員)

現在議論されているところで言うと、最初の説明では9クラス規模という大変大きな子どもの数の減少があるということだが、子どもの希望に合うような学科はしっかりと配置してほしい。しかし、9クラス規模の子どもが減る中で学科を維持しているとすると、35人学級をかなり増やさないといけなくなると思うが、いま現在どう検討されているか。

(高校魅力化推進室長)

学びの保障ということで一定の規模がある地域の拠点となる学校には、中学生が希望する学びを維持できるような、そういうような定員を考えていく必要あると思う。

今後、長期的には学校・学科の再編等も出てくると思うが、地元・地域、それから中学生、場合によっては小学生の保護者等の意向を聞きながら、どういう学科が必要なのかということを目的に早い段階でニーズ把握をしながら、または近隣地域とのバランスを考えながら計画的に学科設置を検討していく必要があると考えているが、今の段階では具体的にどこの地域にどのような学科を置いてもらうということは考えていない。

ただ文部科学省も小規模化する高校について、今いろいろ課題を持って研究を進めているところではあり、そういった動向もしっかり見ていく必要があるとは思っている。

(委員)

再来年7クラス規模の生徒数の減少が想定されており、この2年間で16クラス規模の生徒数の減少となるので、我々も学びの保障というものに対して、十分に検討していかないといけないと思う。

(高校魅力化推進室長)

基本的にはまず、例えば複数ある学科を削るなど、完全に学べなくなってしまうようなことがないように慎重に検討し、来年の募集定員を検討してまいりたい。

(教育長)

減少傾向というのは途中令和8年度に一旦増加する見込みではあるが、それ以降は、急

速に減っていくので、子どもの希望を生かしながら学校の方をどうしていくのかが、
うところが大きな課題と認識している。

以下、非公開のため省略

閉会